

系統を失ったいま、突撃命令の伝達手段さえなくなっていた。師団司令部や連隊本部は麾下部隊の掌握もできなくなっていた。これが一カ月前の首里の戦線であれば壮絶な全軍突撃ができたであろう。

敵上陸以来はぼ三カ月、兵は飢えに苦しみ、精神的にも人間の耐えられる限界を超えてしまったのだから。弾丸も使い尽くされてしまった。

戦車砲・迫撃砲・火焰放射などによる敵の総攻撃が開始された。軍司令部のある摩文仁の丘からは一発の砲も機銃さえも火を噴くことはなかった。聞こえるのは散発的な小銃の発射音だけである。

日暮れを待って私も海岸へ逃れていった。水際には多くの兵がうずくまったり退路を求めて右往左往していた。後には摩文仁の丘が黒々と横たわっていた。

陸軍特別幹部候補生

長岡原の青春

東京都 村田 貫 二

特幹の操縦の適性検査に落ちて、失意のどん底に浸っていた私の手元に、昭和十九（一九四四）年四月十二日、「特別幹部候補生ニ決定ス。仍テ左記ノ通入校スベシ」という、陸軍航空本部長よりのがきの通知書を受け取った。それで、私は四月二十日の午前八時まで、茨城県長岡村の「長岡陸軍航空通信学校」（この名称は、戦後、加藤実候補生から借りた「軍隊手牒」によると、「昭和十九年四月二十一日陸軍密第三二九四号ニヨリ陸軍航空通信学校長岡教育隊ト改称」とある）へ入校することになったのである。

忘れもしない昭和十九年四月十九日の朝、あいにく小雨そぼ降る中、私はたくさんの日の丸の旗を持った

部落の人々に見送られて、見なれた故郷（現八王子市美山町）を後にしたのである。

当日の午後、水戸駅に着き、駅前の受付を済ますと、幾十人がまとまって、軍用トラックに乗せられた。立ってお互い肩につかまりながら。そして、かなり走った後、いかめしい教育隊の正門に到着したのである。

私が約十一カ月お世話になった教育隊は、正門の左側に衛兵所が、続いて松林の脇に本部、炊事場、浴場などの建物があった。

その向こうに二階建ての古い校舎が、電鍵講堂を中心に挟んで、二列に六棟整然と並んでいた（一棟二中隊ずつ入っている）。それらの右側に道路を挟んで総隊本部、その後方に材料庫、更に、その並びに車庫や器材庫の建物があった。

正面の正門から真っすぐに延びた幅広い道路の奥に、体操場があり、その向こうには、松林に三方囲まれた広大な草原の練兵場が広がっている。体操場の左

側に受信所があり、通信の象徴とも言うべき高いアンテナの鉄塔が建てられてある。

教育隊の周りは、野趣満々たる起伏に富んだ雑木林や畠の農村地帯であった。私たちがトラックに乗って、教育隊に着いた時には、既に四月十日に入校していた候補生たちの、徒手訓練を受けている姿があった。「ビー、ビー、ビー」という電鍵講堂からのモース信号音も聞こえてくる。私はいよいよ通信学校へ入校したんだなという実感が湧き、全身が引き締まる思いがした。私は第八中隊第二班への配属が決まった。

長岡教育隊は、第一中隊から第十二中隊まであり、約二千四百余人の候補生が（年齢的にいえば、十五歳から二十歳未満まで）、筑波の峰を仰ぎつつ、ここ長岡原頭で航空通信の練成に一丸となって励んだのであります。

内務班は一班から六班まであり、一、二班は年長者が比較的多く、六班は年少組みであった。二班の例で

い、え、ば、廊下を挟んで舎前（南側）と舎後（北側）があり、それぞれ二つの机と、細長い腰掛けが四つずつ置かれてある。廊下側に銃架があつて、三八式歩兵銃が整然と立てかけてあつた。

その銃架から窓際にかけて寝台が並んでいる。班員三十四人ぐらいたつたので、多分九つずつ位の割合で四カ所向かい合つてあつたらうか。分厚い机は銃の手入れの時に使い、食事の時には食卓に早変わりする。要するに内務班は、居間であり、食堂でもあり、寝室も兼ねていたのである。

最初の日、私たちは軍衣とか、軍袴といった身につける官給品を支給された。更に装具として、三八式歩兵銃（菊の御紋章が付いているために、兵隊はどれ程苦労したか分からない。明治三十八年式、全長一、二七六メートル）、帯剣（全長五二、七センチ、刃はついていない。外地へ赴く時には、グラインダーで刃をつける）その他である。

軍衣には、襟に二つ星の一等兵の階級章と、幹部候

補生を表す丸に星印の金色の座金が付いていた。更に、右胸には、飛行機の翼の形をした布地に、星とプロペラの航空胸章も付けてあつた。

私たちはある候補生の指導で、これら官給品の布地に、石鹼をこすり込んで、墨で氏名を書き入れた。一応註記や支給が終わると、今までの私物は脱いで、官給品に着がえることになった。ただし、禪だけは私物で、使い慣れたパンツは許されなかった。禪はあまり好きでなかったが、股間が引き締まってきたりとするようだ。

稲垣史生（時代考証家）という人は『ふんどし奇談』という話の中で「禪は『日本書紀』に見える。語源はよく分からない。禪はぶらぶらする股間の軟体垂下物を、締め上げ固定するのが主要用途であろう」と、いみじくも述べておられるのを、戦後何かの本で読んだ記憶がある。

電鍵講堂には、前に引き戸のついた高い教壇があり、その上に教官用の大きな教卓があつて、私たち候

補生の机と相對峙していた。私たちの机には、右側に電鍵が一つずつ備えつけられてあった。

最初に電鍵の打ち方の基本を教育された。まず背筋を伸ばし、姿勢を正しくして、右手の中指と人差指で電鍵の丸い摘みを軽く押さえて、親指を下から軽く摘みに添える。教官の「イチ！」という号令で手首を上へ上げ、「トン！」で下に打つ（手首がバネになって、瞬間的に「イチ」の状態になる）。「サン！」で元に戻す。その動作を「イチ、トン、サン。イチ、トン、サン」と繰り返し行う。

モールス符号は、短音と長音とを組み合わせる表す通信符号で、長音は短音の三倍の長さであった。略数字などは、一分間に六十字が標準とのことであるが、佐々木候補生は、まだあどけない十五歳でありながら、その倍の速さで送信しているのを見たことがあった。その時、手首のバネが目にとまらぬくらいに連動していたのである。

このモールス符号は、トツ方式の音で覚えるよう

に教育された。これは別名を音像方式ともいった。例えば、略数字でいえば、「1」は「トトツツツ」、「2」は「ツツツトト」、「3」は「トトト」というようにである。

しかし、私たちと一緒に遅く入った候補生の中には、既に合調音で符号をすべて覚えていた人もいて、羨ましく思ったこともあった。

合調音方式というのは、例えば和文の場合、「イ||イ・トウ（伊藤）」「ロ||ロ・ジョー・ホ・コー（路上歩行）」「ハ||ハ・モ・ニ・カ（ハーモニカ）」というように、ある言葉に変えて覚える方法である。音像方式にしる、この合調音方式にしる、それぞれ一長一短があると思うが、私たちが修得した音像方式の方が良かったと思っている。

次に、受信教育では、教官の打つモールス符号音をレシーバーで聴き取って、軍用電報用紙のマスに、例えば、略数字の場合には横書きに四桁ずつ記入していくのである。

その際、大切なことは一字ずつ遅らせて書いてい

く。教官の打つ符号が、「1・2・3・4……」の場合、「3」を聴きながら「2」を書き、「4」を聴きながら「3」を書くというように……。それから、聴き取れない数字は、その所を空白にして次へ書いていくのである。

モールス符号には、先に挙げた略数字や、「一、二、三、」といった漢数字、片仮名の和文「イロハ」の四十八文字などがあつた。(略号としては「ウナ||至急電報」「レカ||了解」「ライ||軍機電報」「アテ||宛名」「ホネ||本文」「テセ||訂正せよ」など)。相手に送信する場合、電文の冒頭に、「呼び出し符号」を打つ。

それは、「トト|| ツートツ|| トト|| ツートツ|| ツートツ|| ツートツ|| ツートツ|| ツートツ|| ツートツ|| ツートツ|| ツートツ|| ツートツ|| ツートツ|| ツートツ|| ツートツ|| ツートツ||」で、電文が終わると、終信号の「トト|| ツート」と打ち、返事を乞う往信号の「ツート|| ツート」で結んだと記憶している。

送受信の時に使う軍用電報紙は横長の紙で、私は転属した部隊で使ったのを持っているが、大分黄ばんで

いる。縦は一七・五センチ、横は二・四センチあり、すべて横書きに印刷した電報紙である。

「モールス符号」を創案したモールスは、『世界人名事典』（数学研究社）によると「アメリカの画家、有線電信機の発明者」とある。更に、本文を要約すると「エール大学に学んだ彼は、画家を志してイギリスに渡った折、電磁の話聞いて、これを使えば遠い所に通信を送る方法が得られると考えて、一八三七年に電磁石を利用した通信機の組み立てに成功し、後に実用化された。また、彼の『モールス符号』は、今日世界に広く行われている」と紹介している。

いずれにしても、モールス符号は、まあ、略数字はよいとして、漢数字、とりわけ和文ともなると、似たような符号がたくさんあるので、覚えるのに大変であった。しかし、送受信のテストも頻繁にあつたし、私たちは一日でも早く通信技術を修得して、実施部隊へ配属されて活躍したいと願っていたので、毎日必死にアタックしていったのである。

約一年間の長岡教育隊の生活を通して、佐々木大尉が炊事場で自爆した光景を見た時ほど感動し、胸に深く刻み込まれた事はなかった。

忘れもしない昭和二十年二月十七日、この日は朝からの「警戒警報」続く「空襲警報発令」で、私たちは正門の少し前のタコ壺に入り、銃と実弾を持って緊張した眼差しでよく晴れ渡った二月の空を見上げていた。

やがて、B 29の編隊が次々に現れて、遙か高い上空を銀色に輝きながら悠々と飛んで行く。瞳をこらすと、それを目がけて日本の戦闘機が、群がっている雀のように追っ掛けていた。上空では既に激しい戦闘が繰り広げられていたのである。

と、突然、日本の戦闘機の一機が煙を吹き出し、やがて炎となって垂直に落ちて来た。見る見る中に機影は大きくなってくる。見よ！ 航空服の操縦士が紅蓮の炎に包まれながら、白いハンカチを振っているではないか！（もしかしたら白いマフラーであったかもしれない）。

息を呑むような瞬間、戦闘機は私のいる所から斜め左側の炊事場のあたりへ「ドカーン！」という大音響と共に突っ込んで行った。

私たちは瞬間総立ちになって、もくもくと黒煙を上げていた炊事場の方をいつまでも凝視していた。胸をキューンと締めつけられるような感動であった。

この壮烈な死を遂げた操縦士は、佐々木大尉で、陸士の第五十六期、二十四歳の若さであったという。私は御国の為とはいえ、人生のはかなさを、この時ほど感じたことはなかった。

戦後、長岡教育隊の炊事場と思われる跡地に、四カ所赤煉瓦の積まれた所があった。そして、その一角に佐々木大尉のお墓が建てられてあった。私は今でも、白いハンカチを振って最期の別れを告げて、壮烈な自爆を遂げたあの若い操縦士の顔を忘れることはできない。いつまでも佐々木大尉のご冥福を祈りたい。

平成六（一九九四）年七月、私は札幌市の高田敬一君（同じ第八中隊）から、佐々木大尉自爆の目撃談が

認めてあったお便りを頂いた。

「小生は当日、練兵場の松林の中で、燃料の警備をしていました。小生の目撃記憶では、佐々木大尉の乗っていた戦闘機は一式戦車で、相手はグラマンF6F二機でした。それも高度僅か百二、三十メートルの低空まで追尾して来て、一連射、大尉は被弾したのか、急上昇してからまっ逆さまに炊事場を直撃したのです。吉田の本校飛行場では、グラマンが入れ代わり立ち代わり、ロケット弾を叩き込んでいるのが望見できました。

夕方、帰班するや否や召集をかけられ、本校飛行場へ戦死者収容のため直行、暗夜、氷雨の降る中を手探りで顔半分、足一本、手首などカマスに詰めました。「何をグズグズしとる。戦場の常だっ」と、西村軍曹に叱咤されたのを覚えています。五体満足なのは爆風で叩きつけられた一体だけでした。帰ってから屍衛兵に立ちましたが、なんともやりきれない思いでいっぱいでした」

と、いうように高田君は、空中戦の様子や日米双方

の機種など的確に捕らえていた。そして、知られざる本校空襲の悲惨な有様も認めてくれたのである。

更に私は、前橋市の旧知小村恵美氏（第九中隊）から、平成六年八月に、佐々木大尉に関する貴重な資料を頂いたのである。その中の一部をお伝えしたい。

「新聞の切り抜きを見ますと、炊事場に最も近い所に住む人から市役所へ訴えがあり、毎年二月になると頭痛がするが、この土地に何かあったのか？ との事で調べたところ、昭和二十年二月十七日に、日本の戦闘機が墜落したが、未だその遺体が発見されていないので、あるいは？ という事で、昭和二十七年にユニボを使い発掘したところ七メートル程掘った所で遺体が発見され、その後は付近に住む人も頭痛が消えたとのこと、そんな記事が出ていました。

水戸市内に住む姉の鈴木とね様が、遺体発掘現場で確認された事は、出撃前に手編のセーターを佐々木大尉に贈ったのですが、『当日弟はね、そのセーターを着ておりました。そのまま私の編んだセーターが土の

中から現れました」とのことでした」

なお小林氏は二伸として、「佐々木大尉の墓標は今
は長岡にはなく、水戸市の護国神社の境内に移されて
おります」と、書き添えられてあった。

このように私は、お二人の同期から、佐々木大尉に
関する貴重な資料を思いがけず頂き、持つべきものは
戦友だなあと有難く思い、心から感謝したのである。

尚、その後分かった事をお伝えすれば、佐々木廣大
尉の同期の市川健次郎氏（茨城県千代田町）や、藤原
氏などのご尽力により、佐々木大尉の令姉鈴木とね様
（水戸市）、同じく令弟の佐々木晃記様（岩手県古川
市）らのご遺族をまじえて、佐々木大尉の命日にあたる
平成九年二月十七日に、水戸市護国神社の墓標の前
で、第一回目の慰霊祭が、おごそかに取り行われたと
の事である。

十月一日に上等兵に進級した私たちは、十二月二十
九日、いよいよ晴れの卒業式を迎えた。

陸軍航空通信学校長陸軍少将田中友道閣下も臨席さ

れ、訓示を賜った後、池田馨中隊長より一人一人「右
者本校特別幹部候補生ノ課程ヲ卒業セシコトヲ證ス」
という卒業証書を授与された。私たちはここに、名実
ともに一人前の軍人となったのである。しかし、卒業
してもただちに転属ということはなく、三月頃まで待
機し、その間、補修教育があるとのことであった。

たしかこの時、昭和六十三年十月に行われた伊香保
温泉の福一旅館での戦友会で、お盆を両手に持って、
裸踊りをして会場を沸かした幹事の佐復富美雄候補生
（群馬県渋川市）が、航空総監賞を頂いたと思う。

鼻下に髯を蓄え、頗る謹厳実直な陸軍少将田中友道
閣下も、よもやこの前途有望な若桜の佐復候補生が、
戦友会の席上で、こともあろうに裸踊りをしでかすな
んて、夢寐だに思わなかったに違いない。

それはそれとして、佐復候補生は隣の第二班であつ
たが、頭脳明晰で、かつ達筆家でもあったので、よく
中隊事務室に呼ばれて、事務の手伝いをさせられてい
た。佐復候補生は、加古川教育隊へ転属となり、復員
後、郷里の渋川市主催の書道展などに作品を出品した

りして活躍中である。

さて、思えば長岡教育隊での生活は、実に厳しい訓練に明け暮れたものであった。

夏、炎熱焼くが如きに、完全武装して約四キロの道程を往復の早駆けさせられた時は、実に死ぬ思いだった。

厳しい冬の朝、霜柱のキラキラ輝く地面の体操場で、重い銃を右手に、左手を冷たい地面に付けての何回もの匍匐前進、手の平が真っ赤になり、はては痛さを通り越して、感覚が無くなってしまった訓練もあった。

この時の指導教官は仏の工藤少尉で（この方はかつて一度も私たち候補生をなぐらなかつたので、このような敬称を奉っていた）長身で、謹厳実直そのもの、当時二十七歳の若さであったという。

戦後、区隊長は東京池袋駅近くにお住まいで、惜しいことに、平成三年三月に亡くなられた、と奥様からお聞きした。一度お目にかかりたいと思っていたの

に、大変残念であった。今でも工藤区隊長の懐かしいお姿が浮かんでくるのである。

食べ盛りの私たちには、三度の食事も十分でなかった。そんな折、A候補生が食事当番の後に付いて行って、炊事場でどこでどうするのか分らないが、いつも飯盒いっぱい温かいご飯をかすめて来るのであった。そんな時にはいつも私や佐々木候補生に声がかかって、電鍵講堂の身をかがめれば前から潜り込める教壇の下で、お互いに顔を見合わせながら、ご馳走になった事もあった。

楽しかった事、嬉しかった事も多くあった。外泊、外出、面会、新旧、遊泳演習、通信野外演習、本校見学など数え切れない程。

私たちは若さと情熱があった。卒業式にあたり、この日を期して、いついかなる時にも転属できるよう、一層通信の腕を磨いておかなくてはと、改めて決心したのである。

私は一年五カ月という短い期間ではあったが、旧軍

隊生活を体験できた事を、また、それによって、日本全国に多くの戦友を得た事を幸せと思っている。

憧れの水戸陸軍航空通信学校へ入校でき、日本一の第一航空情報連隊（静岡県磐田市）へ転属できた事も、これ以上言う事なしと思っている。

昭和六十年三月、教職を停年でやめ、その後の五年間の都の嘱託員時代も、アツと言う間に終わってしまった。今は世田谷の里で、糟糠の妻と二人暮し、毎日が日曜日となった。

私は今年喜寿を迎えた。いくつ年をとっても、厳しい訓練に明け暮れた、あの長岡教育隊での生活が、ひしひしと懐かしく思い出されてくる。

今日の平和は、若くして散っていった戦友たちの犠牲の上に築かれている。二度と不幸な戦いをしかけてはならないのだ。

陸軍にしろ、海軍にしろ、雲の墓標となられた方々、草むす屍、水漬く屍となられた方々のご冥福を心から祈り擲筆したい。

【解 説】

—陸軍特別幹部候補生制度の発足—

昭和十八年十二月十四日、現役下士官補充及服役臨時特例により、翌十五日市町村官公書において一斉に特別幹部候補生の募集が、本土はおろか台湾・朝鮮・満州までに開始された。

募集の期間は昭和十九年一月三十一日までとある。兵種は航空兵・船舶兵で年齢は大正十三年四月より昭和四年四月一日までに出生の者である。また十二月二十四日には、明年より徴兵適齢一年引下げ満十九歳で壮丁検査を実施の勅令が出る。我々は昭和三年・四年生まれの中学中学三年生であった。当時は共学はなく男子校の場合は各中・商・工学校に軍管理区司令部から配属将校が各校に派遣されており軍事教練が正課であった。

一年に一度、軍・管区司令部による軍事教練の査閲があり、その成績の発表如何は校長の首を飛ばす位の権限を持っていた。その配属将校が三年・四年・五年の生徒を講堂に集めて「国の存亡にお前達はどう思

う」と問い、そして陸軍特別幹部候補生の募集要領の発表が行われた。

男子は何れは軍に往かねばならぬ事だけは決まっていた。先行き陸士・海兵を志願するつもりではいたが、とにかく願書を親に内緒で提出し軍から通知が来る。二月五日レントゲン検査。翌日身体検査、膀胱の皮までめくられる。その結果、甲種合格を言いわたされる。親は、身長・体重等から合格にはならぬと思っていたらしい。ところが、軍は肺病・花柳病以外はなるべく合格させたいらしい。

三月には赤紙が参り陸軍航空通信学校・加古川教育隊に入校し所定の検査を受けよの命令書が届いた。四月十日には陸軍一等兵の階級証をつけ、菊のご紋章がついた九九式短小銃を拝領した。

入校式では航空士官学校卒の将校より「お前らの命は貰った」これが始めに受けた言葉である。次に人事担当の准尉より「現免になって還れると思ったたら大間違いだ」大変な所に入った事を悔いたが後の祭りだった。特幹志願者の分科は、操縦・整備・通信の科目別

はあるが、それぞれの学校に入校した者と部隊に入隊した者が有ったらしい。

更には応募者数多く、数度に分けて入校隊させた事が戦後にわかった。私共は、充分教育をされた方だと思われる。昼は軍事訓練、夜は通信についての、通信学理からモールの訓練が始まった。こんなにも軍隊とは勉強する所かと思う程詰め込まれた。しかし若いため電鍵を打つのと受信はひけをとらなかった。郵政学校等の廃校になり既習者として入校した同期生以外では、我々の十五歳、十六歳の年少組が、成績は抜群であった。

秋になり十月頃故郷に外泊二泊が許された。親に生き別れして来いという意味である。故郷で幼なじみの隣人の女性に「親を宜しく」というのがやっとだった。後からその子の母親が飛んで来て私の肩を叩いて「銃後は心配するな」と励ましてくれた。

その年の十二月末に卒業する。昭和十九年十二月末、第一陣が台湾に転属した。翌年一月十九日米軍B17爆撃機一〇〇機が明石にある川崎航空機の工場を爆

撃、各中隊より数人、明石工場に派遣、援護活動をする。戦争が近くまで来ている事を実感する。

三月になると転属の命令が出た。満十六歳の門出である。加古川駅より行く先不明で客車に乗車する。下関につく前にどこで乗車したのか満蒙開拓軍の少年と会話する。「どこへ行くのか」「満州であります」「そうか頑張れよ」と励ます。

「兵隊さんも」と言われる。彼らの歳は私達より一つか二つ位下であった。九州に来て部下拝領のニュースが流れ同期の年長者から「俺達の名折れにならぬよう」とはっぱを掛けられる。

菊池にて十九歳の召集の新兵を受領する。各班に十人位だ。わたしも第六班の班長となる。それから行軍し熊本・龍田で小学校を占拠し駐留する事になる。部隊名は、第六航空軍・第七十一対空無線隊。総数は二百三十一人であるが、少飛十五期・特幹一期四十数人の内、選抜の十人位が班長となる。

特幹は加古川で対空通信の教育を受けた第五・六中隊の仲間である。どうもぎこちないが、私も第六班の

班長となる。「班長殿、食事準備終わりました」「よし食事始め」である。それから沖繩・爆撃隊・第六十中隊の送受信を受け持つ事になる。私もその一人になった。フィリピンから、沖繩戦のために展開した爆撃隊の送受信が担当であった。

爆撃機はキ六七と称する四枚羽根の最新鋭機であった。ただ不思議な事に九州における、我々の航空部隊は連合艦隊司令長官が我々の最高司令官であった。総攻撃といっても、四、五機で夜間飛び立っただけだ。制空権は殆ど米軍にあり我々の攻撃の翌日は必ずと言っていいほど大刀洗に米軍が爆撃に来たようだ。熊本・健軍の秘密飛行場は終戦まで見つからず、米軍を悩ました事と思う。森の都・熊本で一本しか滑走路がなく、すぐ森の中に隠した。

二十年の四月一日に米軍は沖繩に上陸した。五月になつてから、何か幹部の動きが慌たらしい。戦争の活路を開く為の陸海航空部隊による天一号作戦であった。

攻撃誘導の送信回線のなかでは米軍の妨害電波は物

凄かった。五月二十三日健康軍の飛行場を十二機が空挺隊を乗せ離陸した。沖縄の北・中飛行場に胴体着陸を強行するためである。当初は、陸海の航空機による特攻作戦と呼びし攻撃する予定であった。離陸後、第七十一対空通信所には、後ろで渥美第六十戦隊長が着地の報道をまだかまだかの催促であった。花本正通信手「感あり」、私も統いて「感あり」。ただ妨害電波が著しく、機種の種類がはっきりしなかった。

実際には、二機か三機だった事が米軍の資料で戦後確認されている。六月二十三日に軍司令が自決し沖縄戦は終結した。それから何度か沖縄に向かう爆撃機の離陸に送受信の役割を果たしたが、天号作戦以後は我が国が勝てる戦況を信じられなかった。然るに機上通信手になる募集の通達がされた。

その頃、東京より同窓の女子が空襲の怪我で破傷風になり、半年前に死んだとの知らせが届いた。「よし俺も志願しよう！」もうややくそであった。手紙をつかんで川原で半日近く泣いていた。死ぬべき私が生きている。死はやはり怖かった。しかし消えた。八月に

なり広島に長崎に新型爆弾が落され、仁科博士が軍令で調査の結果、原子爆弾だと断定したニュースが入っていた。

八月十日基地の空で逆三角の雲を見、あれは何だと語った事を思い出す。超高空を気流に乗り、熊本方向に流れていた。八月九日長崎の原爆の雲だった。八月に入ってからは、通信機の周波数函を交換し、米国の短波による音楽放送を横穴壕で聞いていた。日本語デマ放送が始まると切っていた。記憶によると大山郁雄教授と聞こえたような気がする。

数日後、終戦の詔勅。お決まりのように八月末復員。「母さんただ今、武運つたなく帰りました」挙手の礼の最後であった。その頃、俄・民主主義者が「だから戦争反対だった」との町のそんな声に「冗談じゃない征け征けと煽り、誰の為に志願したのだ。亡くなった人になぜ感謝とお詫びの心を持たないのか」。誰もいない焼け跡の青空に、晴らしようもない相手に馬鹿野郎……と絶叫したことを覚えている。

追記―航空部隊に転属した他・特幹生の記録

航空については操縦志願者を除き入校隊が異なるも、通信・整備志願者のおよその人数をつかんだが転属先については殆どの航空部隊に参加していた。

明野で昭和十九年末に編成した二百戦隊に特幹生が九十数人転属し戦死。硫黄島・沖繩でも多数戦死。しかも特攻機出撃後は歩兵切込隊員となって戦死。その他、シベリア抑留で病死。それらの仲間は十六歳、十七歳、十八歳で死線をさ迷って来られた者が余りに多い。

職業軍人・召集による犠牲者は戦争であれば止むなしとすれど、この召集年齢未満の青少年達を死に追いやった事に、どうしてこの国の記録に残さないのか、余りにも亡くなった同僚に気の毒でならない。今の青少年に戦争の惨禍を、繰り返してならぬ悲劇を後世に残して欲しいと思う次第である。

(会員 青木 誠 記)

昭和十九年

三月 京華中学校・三年卒業で退学

四月十日 陸軍特別幹部候補生として加古川教育

隊入校 陸軍一等兵

十二月 同校卒業

昭和二十年

三月 六航・第七十一対空無線隊 第六十戦

隊・沖繩爆撃の送受信

(熊本県・飽託郡・龍田村に展開)

五月二十三日 天一号作戦・参加、義烈空挺隊を

沖繩飛行場に送る

九月 復員(陸軍伍長)